The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「亡命」と越境する想像力ー戦後転換期における在日中国系知識人の文芸活動をめぐってー
Author(s)	呉, 穎濤
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101738
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（NG RICHARD WING TO 呉穎濤）	
論文題名	**「亡命」と越境する想像力** **―戦後転換期における在日中国系知識人の文芸活動をめぐって―**

論文内容の要旨

本論文は、1945年以降の東アジアにおける政治・社会秩序の再編という転換期において、大日本帝国の衰退に伴い、旧領域から日本列島へ移動せざるを得なかった中国系知識人の経験を、「亡命者」という視座から再検討する試みである。特に、1950-60年代以降の戦後日本において活動した陶晶孫、景嘉、胡蘭成、邱永漢の4名に注目し、彼らが展開した「亡命者としてのパフォーマンス」が当時の日本文化との交流や、文化・アイデンティティの再構築にどのように寄与したのかを考察する。

戦後日本は、占領政策、冷戦構造、脱植民地主義、新たな国民国家形成といった動向の中で、複雑な文化的境界を内包する社会へと再編された。こうした中、中国本土、台湾、香港などから政治的脅威や帰国困難の状況を背景に日本に留まった中国系知識人は、単なる政治難民にとどまらず、外部者として能動的に日本文化の形成に貢献した。彼らの創作や思想活動は、自己のアイデンティティや新たな文化的現実を能動的に構築するプロセスとして、文化理論におけるパフォーマティヴィティの概念で理解できる。

対象となる4名の知識人は、1950年代以降の日本社会における活発な文化交流の中で、多くの作品を発表し、一定の読者層と社会的評価を獲得している。命の危険を伴う脱出という経験は、単なる「逃亡者」としてのレッテルを超え、深い文化交流や創作活動を通じた自己表現を可能にし、「亡命者」としての独自の存在感を形成した。また、戦後日本における彼ら自身の表象と、日本側（読者や交流相手）による「亡命者」イメージの形成は、自己と他者の認識に新たな局面を提示し、独自の文化的景観を生み出す要因となった。

従来、亡命知識人は自国から「裏切り者」として排除される傾向にあったが、近年の研究では彼らの越境的創造性に注目し、単なる地理的移動ではなく、創作や思想活動を通じたイメージ再構築の過程に意義があると再評価されている。歴史的に「亡命」は戸籍を離れ身を隠す行為とされてきたが、現代においては国家の迫害や保護の文脈と結び付けられ、記憶・アイデンティティ・言語といった近代的基盤の再構成プロセスとして理解されるようになっている。すなわち、亡命は特定の歴史的・政治的文脈の中で生成され、時代ごとに再解釈・再生産される動的な言説である。

特に戦後日本においては、中国系亡命知識人が思想や文化的議論に参与し、独自の創作活動を通じて単なる「逃避者」や「外来者」にとどまらず、新たな文化的景観を構築していることが注目される。彼らのパフォーマンスは、固定化された国民国家の枠組みや境界を超え、流動的かつ多義的なアイデンティティの形成、さらには記憶や言語の再交渉を内包しており、現代における国境やアイデンティティの再考、また新たな文化対話の可能性を示唆する。グローバルな文化環境や情報化社会において、彼らの「移動する知性」は、固定的枠組みを超える多様な自己表現のモデルとして再評価されるべきである。

以上を踏まえ、本論文は「亡命者としてのパフォーマンス」に注目し、対象作家たちが日本渡来後、既存の社会枠組みから距離を置いた視点と言語を用いて現地文化と交わりながら、新たな理解や思想を創出していく過程を明らかにすることを目的とする。ここでいうパフォーマンスとは、単なる地理的移動や物理的逃避にとどまらず、他文化・他社会の中で自己のアイデンティティを能動的に構築し、交流を通じて新たな現実や視点を生み出す創造的行為を意味する。この視点に立てば、亡命者としての作家たちは、新たな社会に働きかけ、異なる文化空間において自己の存在意義を確立しながら、文学や思想の新たな可能性を提示したといえる。

本論文は、第一章で戦後日本に亡命した中国系知識人の歴史的背景と「亡命者」という概念を整理した。彼らは旧帝国版図に属していたにもかかわらず、新たな国民国家秩序に組み込まれず、政治的圧力を避けるため日本へ移動、国境上の生活を余儀なくされた。従来は政治難民や傍観者として語られてきたが、本章では亡命者が日中文化交流の中で生成されたパフォーマティブなアイデンティティであり、戦後日本の知識人社会がアジア主義や共存の

可能性を再考する上で重要な存在であることを示した。

第二章から第五章では、各作家へのケーススタディを通して、彼らが如何にして自身の置かれた状況を活用し、独自の表現やパフォーマンスを展開、文化交流や自己表現を試みたかを検証した。

第二章では陶晶孫に焦点を当てた。彼は中国本土、台湾、日本のいずれにも完全には属さない「傍観者」として、漢文・儒教思想や明治期の文明開化へのノスタルジアを媒介に、新たな日中間の「共通言語」の可能性を探求した。戦後日本における再評価を目指し、文明開化の精神を復興する作品を執筆し、「亡命者」という立場を越えた文化的架橋を試みていた。具体的には、遺稿集に収録された「セントラルサプライの泥棒：ある看護婦の話」や「漢文先生の風格」などの作品を精読することで、陶がいかに明治末期・大正初期への憧れや漢文・儒教的素養を通して日中交流の展望を作品世界に織り込んでいたかを明らかにした。さらに、竹内好や伊藤虎丸の遺稿集への言及を参照し、これらの作品が戦後日本の文芸・文化においていかなる意義を帯びていたかを確認した。

第三章では景嘉を取り上げ、その創作と足跡を辿ることで、彼がいかに亡命者としてのパフォーマンスを形成したかを解明した。具体的には、日本人漢学者宛の自述詩や、日本語・中国語の口述を大衆小説家小山寛二が日本語へ翻訳した武侠小説『酔鬼張三伝：中国武術神秘達人』に注目した。景嘉は張三という武侠の江湖世界を舞台に、自らが理想とする伝統的読書人のイメージや、清朝帝国期への憧憬を表現している。彼は清朝的世界観や文人的思考様式を再構築し、日中知識人の間に新たな思想的資源を提示することで、日本の読者に東アジア伝統を見直す契機を与えた。

第四章では胡蘭成に注目し、戦前・戦後における日本人作家および台湾人作家との交流が、胡自身の亡命者としての表現とパフォーマンスの形成にいかなる影響を与えたかを考察した。胡蘭成は中国古典文化や詩歌表現を介して日本文壇に新たな価値観を提起し、歴史的想像力や美的演出を駆使しながら日本の知識人層と対話を図った。これにより、彼は自らを「漂泊孤客の文人」として位置づけ、過去と現在、さらに東アジア諸文化を交錯させることで新たな文芸的可能性を提示した。

第五章では邱永漢に焦点を当てる。彼は直木賞受賞後、石原慎太郎の芥川賞受賞による一時的な埋没から抜け出すため、自らの表現戦略を転換し、「アジア人」として位置づけることで、中国人でも日本人でもない「あいだ」に立つ亡命者の視点から大衆文学を創り出した。『西遊記』の改作においては、漢詩・漢文と日本語表現を巧みに組み合わせ、現代日本社会に適合するモダンな物語を提示した。これにより読者は異文化的な新鮮さと懐かしさを同時に体験し、邱永漢は幅広い支持を獲得した。本章の分析を通して、邱永漢がアジア各地域のはざまで生きる想像力を駆使し、戦後日本の読者に肯定的な自己像を示し続けることで、文化的立場を確保していった過程が明らかになった。

総じて、四人の中国系知識人は、東アジアの政治変動に翻弄されながらも、戦後日本社会の文化的文脈に働きかけ、漢文、儒教思想、歴史的記憶、アジア主義的修辞といった異文化的資源を媒介にして新たな視点や文学的価値を創出した。彼らは単なる外部者にとどまらず、戦後日本文学・文化界において独自の文化的座標を打ち立て、歴史との対話や自己再定義の課題に応えると同時に、東アジア文化の多層性やハイブリッド性を前面に押し出すことで、多文化共存への新た可能性を示唆している。

本論文では、従来は周縁的存在と見なされがちだった彼らの活動を「亡命者としてのパフォーマンス」という新たな視座から再検証し、戦後日本文壇の文化再構築において彼らが果たした重要な役割を明らかにするとともに、その作品や活動が日本および東アジアの文化史における多文化的創造性、思想的連関、相互翻訳の可能性を具体例として提示した。今後は、他地域出身の亡命知識人や異なる背景を持つ知識人との比較研究を通して、戦後日本における文化交流やアイデンティティ形成の複雑な動態をさらに深く解明することが期待される。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名	（呉穎濤　NG, Richard Wing To）		
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	宮原　曉
	副 査	教授	宮脇聡史
	副 査	教授	林　初梅
	副 査	講師	松村智雄
	副 査	講師	島薗洋介

論文審査の結果の要旨

呉穎濤（NG, Richard Wing To）氏の博士論文は、1945年以降の東アジアにおける政治的、社会的秩序の転換期、日本列島へ政治的な理由により移動した陶晶孫、景嘉、胡蘭成、邱永漢の4名の知識人の経験を、呉氏の論文が定義する「亡命者のパフォーマンス」として解釈し直すことを通じて、「亡命者」が移動することによって生じた複雑な境界を内包する思想的なアリーナの性格を分析しようとした意欲的な論文である。

第二次大戦後の東アジアは、日本に対する占領政策や、アジア諸国の脱植民地化と国民国家の生成、その後の冷戦構造の出現などによってさまざまな境界がさまざまな濃さで引かれてきた。しかし、そうした境界は、その両側の人たちにとって予め明示的なものではなく、「越境者」や「亡命者」と、彼らを受け入れる人たちの間の相互作用を通して意識されるようになる。「亡命者」がどのような場所で、政治的、あるいはその他の理由で迫害を受け、どのような新天地を求めて越境してきたのか、どのような「自国」で「裏切り者」とされ、どのような人物として「他国」に受け入れられたかを確認していく作業が、日本列島における思想的な空間の性格を理解するうえで決定的に重要なのである。

呉氏の博士論文は、こうして観点に即し、膠着した国民国家の境界を越境する「亡命者」の創造性に着目し、亡命知識人の自己表現として彼らの文学的テクストを評価するとともに、亡命者と、それを受け入れる戦後日本の知識人との相互行為のなかに、戦後日本の政治や思想、文学の必ずしもこれまで指摘されてこなかった側面に光を当てようとする。戦後、日本列島に亡命した中国系の知識人たちは、越境を契機に日本の知識人と交流し、新たな思想的な交流の場を生み出し、そのなかでの自己の存在意義を確立しながら、文学や思想の新たな可能性を提示していったというのである。

本論文の第一章で、呉氏は戦後日本に亡命した中国系知識人の歴史的背景と「亡命者」の概念を整理し、「亡命者のパフォーマンス」に関する概念的枠組みを検討したのちに、第二章において、陶晶孫をとり上げ、中国本土、台湾、日本のいずれにも「傍観者」として不完全に属し、漢文や儒教思想へのノスタルジアと、明治・大正の時代的雰囲気への憧憬を媒介に、新たな日中間の「共通言語」の可能性を探求する陶の思想を、「漢文先生の風格」などの作品の批評を通じて明らかにする。陶が思い描く日中間の「共通言語」は、齋藤希史によって「近代以前の中国を起点に東アジア全体に流通した漢字による文語文を原点として展開した écriture の圏域」と定義される漢文脈とも重なりながらも、ユーモアを交えた日本と東アジアへの批判には、ある種の悲嘆が含意されている。呉氏は、そうした悲嘆が戦後民主主義のなかで一所に固執しない生き方を許容する時代の気分が失われつつあることへの悲嘆であることを指摘し、そうした悲嘆と亡命者としての彼の立場に基づく創作が、日本の知識人との交流を促したと論じている。

第三章では、景嘉が執筆に関与した武侠小説『酔鬼張三伝――中国武術神秘達人』に焦点が当てられる。陶晶孫の場合とは異なり、景嘉の場合、亡命者のイメージに、彼が理想とする伝統的読書人のイメージが重ねられる。このため景嘉は、漢文脈を通じた日本と中国の間の思想的交流のなかで、亡命者としてのパフォーマンスをあくまでもポジティブにとらえている。

第四章において、呉氏は胡蘭成をとり上げ、胡が「漂泊孤客」と「浪人」という二つのイメージを手がかりとしながら、亡命に美学的な意味を付与している点を指摘している。「漂泊孤客」という文人像は、胡蘭成が亡命という現実に直面しながら、新たな思想的表現を生み出すための手段であった。一方、「浪人」という高潔な志を保つ

孤高の人物像もまた、彼の自己成型に深く関わっていた。浪人としての自己像は、彼にとって政治的な「裏切り者」というレッテルを、自らの意志で洗練された文人のイメージに作り変えるための重要な要素であったと呉氏は論じている。胡蘭成の日本での交友の範囲はきわめて広く、「漂泊孤客」と「浪人」の二つのイメージを巧みに用い、時代や場所の変化に柔軟に適応しながら、洗練された文学的表現を通じて自らの思想と文学を深化させるとともに、戦後転換期における日本の知識人との対話を喚起し、独特な文化景観の一側面を形成したというのである。

第五章では、邱永漢がとりあげられる。邱は直木賞を受賞した後、石原慎太郎の芥川賞受賞による一時的な埋没から脱却するため、表現戦略を転換した。中国人でも日本人でもない「あいだ」に立つことで、自らを「アジア人」と位置づけ、『西遊記』の翻案など、漢詩、漢文と日本語表現を巧みに組み合わせて、亡命者の視点に基づく大衆文学を創り出したのである。

邱永漢の文学は、彼の作品を単体で読んだだけでは、亡命者のパフォーマンスとしてのその意義を見失う恐れがある。逆に、陶晶孫、景嘉、胡蘭成の文学的なテクストの亡命者のパフォーマンスとしての意味は、邱永漢のテクストを読むことで、より鮮明になる。邱永漢は「混紡的存在」として自らを位置づけるが、この他にも呉氏が引用する邱永漢のテクストには、「〜ではないが、〜でなくもない」といった表現が多く現れる。呉氏の研究でとり挙げられる亡命知識人が、陶晶孫、景嘉、胡蘭成、邱永漢の4名でなければならなかった理由、そしてその並びがこの順番でなければならなかった理由は、呉氏による、邱永漢のマイナー文学的とも言えるテクストの分析を通して明白になるのである。

以上が本研究の具体的な内容と評価であるが、その学術的な意義について総論的に述べるならば以下のようになる。すなわち呉氏の博士論文は、陶晶孫、景嘉、胡蘭成、邱永漢の4名の中国系亡命知識人の文学的なテクストを、越境者の創造性という観点から再評価し得ることを、文学的なテクストと歴史的な資料を丹念に突き合わせることで一定の説得力を持って分析した点で高く評価し得る。

加えて、亡命者の文学は、漂泊が許容されていた時代とそうでない時代（陶晶孫）、東アジアのécritureの圏域とその外（景嘉）、文人や読書人が求める生き方と美の表現と、文人や読書人以外の人たちの生き方と表現（胡蘭成）といった境界を、何もかもを飲み込もうとしてきた帝国が国民国家へと縮小する時代の変化を目の当たりにしてきた戦後の日本の知識人に投げかけている。陶晶孫の傍観者としての自らの位置づけや、胡蘭成の「漂泊孤客」と「浪人」というイメージ、邱永漢の「日本人でも中国人でもない」というマイナー文学的な喪失感と美意識は、呉氏の用語を借りれば、戦後、東アジアの「文化景観」の一部として、またアイデンティティを形成するモデルとして、日本列島の知識人に受けとめられ、対話を生み出す契機となった。呉氏の博士論文は、戦後転換期における日本列島の思想的な空間が、亡命知識人が越境することで生じた複雑な境界を内包することを明らかにした点で、また、そうした境界の相対化が、日本列島のみならず、東アジアの思想的なアリーナにおいても、アジア主義とナショナリズムに関わる議論を喚起し得る可能性を示唆している点で、卓越した研究であると言える。

こうした呉氏の研究は、東アジア地域研究や文学研究に一定の貢献を認めることができるが、文学批評や人類学、歴史学の視点と手法を駆使した本研究は、「越境」を射程に入れることで、狭義の地域研究にとどまらず、東アジアにおける知識人の交流をテーマとする新たな学術的領域の構想に道を拓くものである。

以上、論文審査の結果、呉氏の博士論文は博士（言語文化学）の学位を授与するに相応しいものと判定した。